



阿佐ヶ谷教会



信友会会報

夏期修養会（7月24・25日開催）報告

信友会・地の塩会合同例会（8月23日）報告

酷暑の8月が過ぎて、秋の気配が濃くなる9月も中旬になりました。
修養会などを題材とした会報は盛りだくさんです。ぜひお読みいただき、会員同士のつながりをご確認していただく一助になれば幸いです。

（A. T記）

夏期修養会（7月24・25日開催）報告

教会標語：「わたしたちは見えるものではなく見えないものに目を注ぎます」（Ⅱコリント4:18）

修養会テーマ：「見えないもの」

2015年度信友会修養会 基調講演

講師：堀川 樹先生

・はじめに

私たちの生活の上で「見ること」による情報が大きな部分を占めています。五感のなかで視覚は87%、聴覚7%、触覚3%、嗅覚2%、味覚は1%と言われます。視覚は大量な情報を得られますが、映画で音を消すと興味が薄れるように全てではありません。そのような中で今回の聖句の「見えないもの」、永遠に存続するものに目を注ぐことの大切さを教えています。

この聖句が記されているコリントの信徒への手紙Ⅱはパウロが異邦人伝道のために残したものです。コリントはパウロが2回目の伝道旅行で1年半から2年ほど滞在して伝道したギリシャでも有力な教会であり、それ故アポロなど多くの伝道者が出入りしていました。パウロは12使徒ではなかったため、その使徒性を疑うなど信徒を惑わし分派活動が激しくなっていました。そのためパウロはこの手紙を書いたのです。ここでの「見えないものに目を注ぐ」にはパウロのダマスコ途上での回心、イエス様との出会いによる霊的な交わりに生きることが勧められています。

・外向的タイプと内向的タイプ

スイスの精神科医で世界的な心理学者であるユングは、人間のタイプに2通りあるとし、外向的タイプと内向的タイプに分けています。一般には、物怖じせず社交的な人が外向的タイプで、人付き合いが苦手な人が内向的なタイプと分類されます。しかしユングはそうではなく、持っている関心がどこにあり、そのエネルギーがどこに向いているかに注目します。社交的でも自分の関心が内面に向いている人は内向的タイプで、気が小さく他人に自分がどう映るかを気にするような人は外交的タイプと分類しているのです。

パウロはユングの分類で言えばどちらに属するのでしょうか。ダマスコでイエス様に会う前のパウロは、キリスト者の迫害に使命感を持ち熱心に行動したので外向的タイプでしたが、復活の主イエスに出逢ったパウロは、



彼は今まで見たことのなかった霊的な世界、復活のイエスに目を向け、その交わりを深めていきました。この段階でパウロは内向的タイプになりました。キリスト者の生き方は、このように復活の主に目を向ける内向的タイプであるように奨励されます。

・外なる人と内なる人

4章18節にある今回の主題は、「わたしたちは見えるものでなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」。見えるものとは16節の「外なる人」と関連があり、その人は衰え滅びに向かうと言われます。また4章7節では、私たちは「土の器」と書かれています。土の器は脆く壊れやすいものです。一方見えないもの、「内なる人」については、神さまによって日々新たにされ、永遠に続くのです。4章11節には「死ぬはずのこの身」とあり、私たちは例外なくやがては死ぬ存在ですが、「内なる人」は、永遠に存続するのです。見えるものを追求する「外なる人」は、一時的でやがて衰えて行きますが、見えないものを追求する「内なる人」は、霊によって、永遠に続くことが約束されているのです。

では、見えないものにどのように目を注ぐことができるのでしょうか。目を注ぐは、ギリシャ語では、「注意する」、「見守る」、「気を付ける」の意味があります。上述の人間のタイプで外向的タイプの人、自分の欲するもの、金や銀、名誉などを大切にしますが、それらは一時的であり消えてゆくものです。内向的タイプは、目に見えないもの、やがて行くことが約束されている神の国を目指し、それを注視することによって歩んで行くのです。

もちろん、見えるものに全く価値がないわけではありません。日々の務めを忠実に行いつつ、家族や自身の健康なども与えられた賜物として大切に受け止めつつ、趣味を楽しむのも人生を豊かにする良いことでしょう。しかし大切なことは、見えるものの先にある見えないものを凝視することなのです。見えるものが一時的あることを踏まえて、見えないものをしっかり見据えて生きていくことです。マルコによる福音書7章20～21節にはこのようにあります。「人から出てくるものこそ、人を汚す。中から、つまり人間の心から、悪い思いが出てくるからである」ここでは淫らな行い、盗み、殺意などの悪い思いのリストがあげられています。もしかすると私たちは見えるものは気にするけれども、見えないものをあまり気にしない傾向があるかもしれません。確実にやってくる老いや死のことを考えてもそうでしょう。気になって仕方がないのです。ですから私たちは内なる人を大切にしてイエス様との交わりや触れ合いを増やすこと、日頃から聖書や信仰書を読む時間を増やすことによって悪い思いから離れなければなりません。これこそが私たちは目に見えない神の交わりに目を注いで生きるということなのです。

・土の器に納められた宝

聖書の示している価値観は、入れもの(外見)ではなく、その中に何を入れるか(中身)です。私たちは土の器にすぎませんが、その中に何を入れているかを問われています。4章7節にあるように、私たちは土の器で出来ていてその中に宝を入れている存在です。土の器にも質の良し悪し、大小など異なる形状のものがあるなど、違いはたくさんありますが、共通するところは非常に脆いことです。落としたり、ぶつかればすぐに壊れてしまいます。しかし直前の6節には「神はわたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました」と書かれています。これは神さまの啓示の光です。これにより私たち土の器の欠けた部分から啓示の光が漏れ出ていると考えることができます。クリスチャンであっても足りないことや失敗は数限りなくあります。それでも土の器の割れ目から神さまの光があふれ出る。わたしたちはそのような存在として神さ



まに用いられるのです。ここに私たちの喜びがあり、平安があります。

では私たちの内に入れられているその宝とは何でしょうか。10節と11節に「イエスの命」が、また12節に「命」という単語がでできます。私たちはイエス様の命、すなわち復活の主イエスの命をわたしたちは土の器に納めているのです。この命は目には見えないので、注意深く目を注がなければなりません。肉体の命に関しては動物とも何ら変わりがないものです。しかし神の命、永遠の

命が、人間には与えられていて、これこそが永遠に続くものです。ヨハネによる福音書3章16節に素晴らしい約束があります。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。永遠の命はどうしたら与えられるのか。それは救い主であるイエス様を受け入れたら良いのです。主イエスを心にお迎えする。それが見えないものに目を注ぐということです。そうすれば神さまが賜物として永遠の命を与えて下さる。そのような素晴らしい約束が私たちには与えられているのです。しかし神さまの存在はわたしたちの行いや努力で勝ち取るものではありません。信仰によって受け取るのです。パウロは、かけがえのない宝を与えられた信仰によってしっかりと受け取るように勧めています。

パウロは、異邦人伝道の中で厳しい迫害を受けていました。4章8節から12節で、激しい迫害の中でも失望せず、死にさらされてもひるまずに戦ったと言っています。想像しただけでもとても耐えることができないような状況です。しかし、打ちたたかれば簡単に壊れる土の器でも宝を秘めていれば強靱だと告白しているのです。

・まとめ 秘められた宝を見つめて

クリスチャンである私たちは、外なる人と内なる人を併せ持って生きています。両面を持つ私たちは、いろいろな葛藤の中におかれています。内なる人に生きる存在であることを認識するためには、聖書を規範として生きることが求められています。聖書は、内なる人として生きるための神さまからの啓示であり、愛と励ましの詰まったラブレターです。教会標語として選ばれたことのある詩編119編105節には「あなたの御言葉は、わたしの道の光、私の歩みを照らす灯。」とあります。御言葉によってこそ私たちの人生の歩みを照らされて、進みゆくことができるのです。御言葉に生かされて、蓄えて主イエスを証しする者として生きるのがキリスト者です。

最後に淀川キリスト教病院のホスピスを開設した医師の柏木哲夫先生の「心をいやす55のメッセージ」(いのちのことば社)で紹介された、上智大学哲学科の名誉教授でリーゼン・フーバー神父の言葉を記します。それは、「内的集中」と「外的解放」という言葉です。自分の抱える様々な課題に注目して集中して考え抜いて、その集中したエネルギーをもって外に解放(行動)することのバランスが大切であると言われていました。

この言葉を読んで、マザー・テレサの生き方を思い出します。彼女の奉仕の生活では、毎朝シスターたちと3時間祈りの時間を持ち、その後に貧しい人、子どもたち、死に逝く人々への奉仕を行いました。礼拝しているその時もメディアに取材をさせなかったほど、神さまとのお交わりの時間を土台としていました。この祈りによって与えられるエネルギーが、彼女の尊い奉仕を支えたその源だったのです。祈りの力に支えられる奉仕の生活。どんなに一生懸命行動しても祈らなければどこかで必ず破綻してしまいます。日常の多忙な生活から退いて静まって神の前に立つ内的集中をもって行動しましょう。この修養会が内的集中を深める時となることを祈りつつ、これからも恵みを受けつつ歩んでまいりましょう。

(文責：玉澤武之)

～信友会 8 月例会(地の塩会との合同例会)報告～



地の塩会と信友会は8月23日の礼拝後に合同例会を開催しました。

出席者は地の塩会8名、信友会22名、合計30名。まず7、8月誕生月の会員を祝い、その後全員の自己紹介を「もし30年前に戻ったら/30年後の自分の理想像」をテーマに語ってもらいました。会員の今までの歩みとこれからの望みを知る良い時を持ちました。

食事は信友会有志シェフ担当の阿佐ヶ谷教会名物『高円寺風冷やし野菜うどん』。すでに3年目で麺とスープと野菜が絶妙にからんでさらに深味が加わり、地の塩の若い会員も舌鼓を打っておりました。

その後、部会混成の5チーム対抗聖書ゲームでお互いに知識を出し合って難問に挑戦したり、また「部会を通じた教会生活～自分にとっての信友会、地の塩会」をテーマに小グループでの話し合いを行いました。

信友会にとっては今後の部会活動の発展につながるいい機会を与えられました。

最後に信友会の故江口三雄兄作詞の「教会標語の歌」を全員で合唱し、充実した合同例会を終了。地の塩会に感謝です。



(写真：分団に分かれての話し合いの様子)



(写真：信友会特製「高円寺風冷やしうどん」)